

1. コラム「論点提起」:「更なるニューノーマル」や如何

東日本大震災において、シビアリスクの連鎖(巨大地震⇒巨大津波⇒原発事故)が発生し、まだ復興・事故処理の途上。近年の気候変動に起因する自然災害の頻発化・激甚化・広域化。そして、2年前からのコロナ禍。コロナ禍により、人流が止まり、サプライチェーンが寸断され、人も経済・財政も疲弊しているなか、ようやくエンデミックの兆しも見えはじめ、with コロナ下でのニューノーマルへの移行のあり方が具体的に問われようとしている。

そうした矢先に、1ヶ月前からロシアによるウクライナ侵攻が始まり、一気に地政学的カントリートリスクが高まっている。核リスクも高まっている。ロシアへの経済制裁に絡みつつ、第二次世界大戦以降の世界の枠組みも大きく変わろうとしている。第一次世界大戦後につくられた国際連盟(1920~1946年)が機能せず、第二次世界大戦に突入し、戦後、戦勝国/連合国(the united nations)が中心となって国際連合(United Nations)がつくられたことを想起させる。

コロナ禍でデジタル社会化への重要性が認識されたが、ウクライナ侵攻で行われている戦いを見ていると、まさにリアルとバーチャルの融合/統合戦となっている。ドローン/無人飛行機も本格使用されている。イーロン・マスクのStarlink(スターリング:人工衛星を介してのインターネット接続サービス)がウクライナに提供されている。これらの技術は当然ながら、戦後の民生(社会システム)にも波及してくる。デジタル化の波が一段上がったレベルで到来するのは必至である。デジタル化の進化のスピードは、リアル社会の変化を加速する。

注: 詳細は、[ブログ 仕組みの群像「ロシアのウクライナ侵攻 1ヶ月の動静」を参照されたい](https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/)
<https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/>

コロナ禍に地政学リスクが加わった「更なるニューノーマル」(社会システムのニューノーマル+国家間枠組みのニューノーマル)の姿は、ウクライナ侵攻/戦争の帰趨に左右されるものであり、現時点では不透明である。不透明ながらも、想定をした対応を考え行動するしかない。

こうした大きな変革期において、個人の人生設計(100年)、官・民組織の短期計画(1年)・中期計画(3~5年)・長期計画(10年)、超長期計画/長期ビジョン(30~100年)等は、内容だけでなく、その位置づけも見直される必要がある。「計画に記載されていないから対応できない」という発想は、東日本大震災で学んだ「想定外を想定する」リスクマネジメントからは許されない。

従前の経験が役に立たない、将来の見通しが定かでない時、立ち返る原点は、当該個人・組織・国の「よって立つ理念」である。「プロセス」でも、「結果」でもない。そして、その理念の実現には相応の「覚悟」が求められる。従来みられた「予定調和」的目標/KPIやPDCA的対処ではなく、「常に状態は変化する」という前提のもとに、理念に基づく長期的な道筋/緩やかな方向に沿って、「変化しても柔軟に適応(レジリエンス)」し、アジャイル(俊敏)的に対応するなかで、最適解を求め続けるしかない。その先にこそ、「更なるニューノーマル」社会が見えてくる。

そこにはイノベーション(創造的破壊)思考と実践が不可避であるが、果たしてその覚悟や如何。